

博士課程教育リーディングプログラム現地視察報告書(平成26年度)

博士課程教育リーディングプログラム委員会

プログラム名称	実体情報学博士プログラム	申請大学名	早稲田大学
申請大学長名	鎌田 薫		
プログラム責任者	橋本 周司		
<p>1. 進捗状況概要</p> <ul style="list-style-type: none"> ・順調に進捗している。特に、各研究室から独立した本プログラムの共通の学舎である「工房」も完成し、着実に運用されている。 ・応募者数も多く本プログラムのカリキュラム及び実施体制も着実に整備されつつある。学生も、それぞれある程度明確な意志をもって本プログラムにチャレンジしている印象を受け、「工房」においても成果をあげつつあることが見て取れた。 <p>2. 意見（改善を要する点、実施した助言等）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「実体情報学」が、機械と情報の両者のセンスを身につける場の提供に重きを置き、学生は主分野の専門性と他分野の開発方法論を得ることができるという説明は理解できたが、その学問体系についてははまだ漠然としている。本プログラムが継続性を持つためにも、早急に、「実体情報学」という学問が何を指すのかということを確認にし、そのための学問体系と教育論を整備して学生を指導できるようにすることが望まれる。 ・「実体情報学」の明確化、体系化にあたっては、定性的な表現に留まらず、効果や根拠を定量的な数値で語れるようにすると、そのインパクトが明確になると思われる。学生達にも、そのような思考プロセスを持つよう教育していただきたい。 ・一人の学生に対して多数の指導者がいることで、学生が異なる指導方針を受け混乱することがないように、各学生の主旨導教員、副指導教員、企業及び海外メンバーから構成されるアドバイザーチームが、個々にではなく、同時に集まって学生を指導できる場を設けていただきたい。 ・「工房」が本プログラムの要であることから、「工房」に多くの人が集まるインセンティブを、より高めてほしい。そのため、本プログラムの学生が実験装置を工房へ持ち込むことを奨励するとともに、多分野にわたる PD、助教クラスの人材を工房内に常駐させる体制を築いてほしい。 ・学生達のアクティブな行動を阻害することが無いように、本プログラムと北九州キャンパスとの一体的な運営を行うことが望まれる。特に、「工房」と北九州キャンパスの連携をさらに密にする工夫をしてほしい。 ・学生が実社会の問題に触れることは本プログラムにおいて重要と考えることから、企業とのディスカッションや企業の若手人材に「工房」に来てもらう機会をふやすことも検討されたい。 ・企業との連携等、7年後に支援期間が終了しても、本プログラムを継続できるような方策を今のうちから練っていただきたい。 			